



発行所  
三重県地方自治研究センター  
三重県津市栄町2丁目361番地  
(一助)三重地方自治労働文化センター内  
TEL059-227-3298  
FAX059-227-3116  
<http://www.mie-jichiken.jp/>  
info@mie-jichiken.jp

# 小さなきらめきを — ストレングスに注目した アーティストの誕生 —

広島文化学園大学教授 **岡本 陽子**

## ある少年との出会い

それは、ある偶然の出会いから始まった。

高等学校3年に在籍する北岡くんは、走る事が大好きで、中でも長距離走を得意としていた。何事にも一生懸命取り組み彼は、「走ること」で気持ちを発散し、心の安らぎを得る場としていた。

ある日、北岡くんはT市が主催するマラソン大会に参加したところ、持ち前の「一生懸命」が災いして、走行中に「倒れ、救護所に運び込まれる」というアクシデントに見舞われた。救急員として応急処置に携わっていた私は、そこで初めて北岡くんとの出会った。

北岡くんはすぐ回復したが、引率していた母親は、状況説明の中で、「この子は高機能自閉症なんです」と打ち明けた。その言葉に、「実は、私はこのような自閉症などの特別支援について深い関心があります」と伝えた。

それを聞いた母親は、息子は幼い

頃からプラモデルが好きで、今、消しゴムのカスで恐竜の造形作品があることを熱心に語った。  
消しゴムのカスで恐竜？どのような作品なのかイメージできなかった。

私は、大会後、作品を見せてほしいと母親に依頼した。

数週間後、母親の持参した作品を観た私は驚きの声を上げた。そこには、数センチしかないが、見事な恐竜が並べられていた。

そこで私は、交友のあった芸術家の三村さんに連絡を取り、母親と三村さんが面談することになった。

そして、芸術家で、また教育者でもある三村さんとの結びつきにより、北岡くんはさらなる飛躍への場に踏み出すこととなった。

生涯に向けて、確かな生きる場を願う私の気持ちを受けとめてくださった三村さんは、北岡くんに芸術大学への進路の選択を勧めた。今では、北岡くんは芸術大学に在籍し、芸術家としての道を歩み始めている。

個々人の内なる力が、少年を取り巻く環境によって引き出されたストレングス事例である。

個人の潜在能力はもちろんであるが、内なるその能力を引き出し向上させるために、力を信じ応援してきた母親を含めた家族、そして大学と

いう教育・社会の場へ送り出し、機会を提供した有志との連携が一人の少年の人生を豊かなものにしていく。何より北岡くんは社会をつなぐ役割を担った母親の存在は重要である。

## 少年を支え続けた母の思い

北岡くんの母親から母としての思いを聞くことができた。

「息子が4歳の時に、高機能自閉症と診断されたから、子どものゆっくりながらも、少しずつ成長していく姿にささやかな幸せを感じつつ、反面、親が子どもに思い描く夢や希望を持つてはいけなないと自分に言い聞かせてきました。

家族で前向きに生きようと懸命に頑張ってきたけれど、いつも頭の片隅には『親亡き後の生活』という先の見えない不安がありました。

高校3年になったある日、自分に自信が持てなかった彼から『僕はもっと色々な物を見たい、もっと色々な事にチャレンジしたい』と言われました。

初めて聞くこの言葉は、今まで守りに徹してきた私の心を揺さぶりました。しかし彼の思い描く事をどう導いていいのかわかりませんでした。

そんな時、岡本先生との偶然の出

会いがありました。私は初対面であるにもかかわらず、彼が自閉症である事を話しました。すると先生は特別支援教育の研究をしているとのこと。『彼には、何か出来ることあるでしょうか?』との問いに、『彼は小さな頃から物作りが大好きで、現在は消しゴムのカスでこんな物を作ります』と一枚の写真を見せると『素晴らしい!一度、実物を私の所に届けて下さらない?』とお名刺を頂きました。

この突然すぎる数十分の出来事に、私は数週間迷い続けました。これを本当に届けてもいいのか:彼が作り出す物に可能性を見出す事が出来ず、自分の中で閉ざしてきた気持ちとの葛藤がありました。

でも、あの時言った彼の言葉を思い出し、私を奮い立たせました。母として、今何が出来るのかを問いました。自分も一歩踏み出す事、ほんの少し勇気を持つ事。

この出会いとほんの少しの勇気で、彼の後の方向性が大きく変わりました。自分に自信が持てなかった彼自身に大きな変化が現れました。環境を整えてあげる事で人間はこんなにも変わる事が出来るんだと強く感じました。」

以上の言葉には、母ならではと思われる、子を思う母親の気持ちが強

く語られていた。

## ストレングス理論

このような偶然の出会いから、北岡くんの進むべき姿が、まだその途上とはいえず、表れつつある事例を社会福祉の支援ケアマネジメントの「ストレングス理論」の視点から捉えてみることにした。

ストレングス(Strength)とは、英語で「強さ・力」の意味である。

ストレングス・モデルは、その人が、元来持っている「強さ・力」に着目して、それを引き出し、活用していくケース・マネジメントの実践理論である。

「できない」といった欠点等に目を向けるのではなく、その個人の人々の持つ能力や良い点に着目し、課題や困難となつている取り巻く環境や社会的資源等を活用し、それらの環境に働きかけ、調整することによって、生活課題を解決するとした(エコロジカルソーシャルワークと言う)支援を行う考え方である。

ストレングス理論は、「人と環境」における相互作用を重視し、人は一人で生きるのではなく様々な環境との相互作用から生活が成り立っていることから捉える視点である。

ここでは、個人の持つストレングスは「願望・夢・希望・能力・技術・

自信・自己効力感」とされ、個人間の相互作用を高めながら個人の持つストレングスをより強固にする。

また、環境の持つストレングスは、「資源・サービス・人・つながり・参加する機会」などとされ、個人ストレングスとの相互作用を高めることによって、個人及び環境の持つストレングスをより強固にする。

障がいのある人や家族のみならず、本人が生活していく場(地域)が、地域の課題を皆で解決していく力との双方を高め(エンパワメント)、一人ひとりの生き方を尊重しあえる社会を創る。個人の内なるストレングスが、環境によって、引き出されエンパワメントへとつながった事例であり、今後の社会福祉や特別支援教育の方向性を示唆した事例である。

教育や医療、福祉の現場では、本来、一人ひとりが持っている力を認め、見出し、それらを引き伸ばし、一人ひとりの成長発展や社会の発展につなげていくことが求められる。

北岡くんのように「走ること」、あるいは「絵を描くこと」、「書に励むこと」は「癒し」かもしれないが、彼の母親のように、一歩でも、二歩でも、能動的な行動や「声を上げる」ことが取り巻く環境に求められる。

## 企画展の開催とその役割

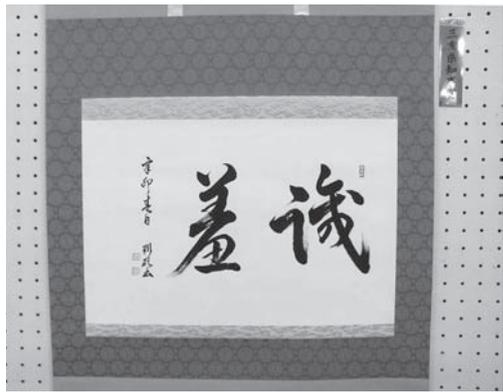
自閉症をはじめ、障がい児・者の優れた芸術活動を支援するなかで、障がいを持つ子どもたちの持つ力を提供し、また、保護者や関わる人々の役割を啓発することが重要である。

一昨年、高機能自閉症の高校生との偶然の出会いから、彼が持つ芸術性の高さに驚き、芸術大学への勧めと個展を開催した。見学者約500余人が感動し、なかでも自閉症児の保護者から「勇気づけられた」「子育てを深く考えさせられた」との意見が多く寄せられた。

このことから、障がいがあってもなくても、互いの心に響きあう作品の素晴らしさを通して、誰もが持つ個人の力を信じ高めあう社会づくりが今こそ求められると考える。その第一歩として企画展を開催することにした。

今回は、北岡青さん及び戸崎健也さん、中野元洋さん他の企画展を行う。3人は自閉症でアーティストである。北岡氏は彫塑、戸崎氏は絵画、中野氏は書の展示を行う。企画展は11月19日(土)〜21日(月)に、伊勢パールセンターで開催する予定である。

ここで、今後のご活躍を祈念し3人について紹介する。



なかの もとひろ  
**中野 元洋**

三重県在住  
5歳の時自閉症と診断される。自閉症の特徴のひとつであるこだわりが文字であり、文字を書くのも眺めるのも好きであったため、8歳から書道塾に通い始めた。10年目の18歳の時、初段を獲得し雅号は「剛碩（ごうせき）」となる。習字を習い始めて20年目28歳の年に、友人知人が実行委員会を結成し個展を1週間開催。平成26年度三重県障がい者芸術文化祭にて、知事賞受賞など。



とどまき けんや  
**戸崎 健也**

神奈川県在住  
1歳までごく順調に成長。保育士経験ありの母が1歳半ごろより変化に気づく。3歳で自閉症と診断。小学校から支援学級に在籍しながらほぼ交流学級で過ごす。中学時代は先生のアドバイスの元、書道絵画に親しむ。その頃よりアトリエに通い始める。高校時代、2度、神奈川県展に入賞し、現在に至る。趣味：水泳 機織り クーボン収集

**著者 プロフィール**

おかもと ようこ  
**岡本 陽子**

広島文化学園大学看護学部看護学科 教授。  
三重県内の小中高校で養護教諭として勤務後、吉備国際大学、甲南女子大学准教授、藍野大学教授を経て現職。  
三重県子ども子育て会議会長及び三重県少子化対策推進県民会議委員等を委嘱され、地域の子どもをはじめ住民の健康福祉の充実に取り組む。  
三重県地方自治研究センターが、就労困難な若者も働くことができる仕組みを検討するために設立した「就労困難者の雇用創出プロジェクト」に、委員として参加している。

きたおか しょう  
**北岡 青**

三重県在住  
4歳の時に高機能自閉症であることが判明。人とのコミュニケーションが苦手であったことから、一人の時間を読書やイラストを描くことに熱中。小学校時代には、興味のない授業中に消しゴムのカスを活用し、様々な物を創りだすようになる。高校3年生時には、スカルビー（プラスチック粘土）との出会いによって、造形の喜びに目覚め、試行錯誤を繰り返しながら我流で技術を身につける。その後、作品が有識者の目にとまり、名古屋芸術大学に進学。現在、大学で様々な素材との出会いや技法の習得を目指し、勉強中。



**おわりに**

今回、ある偶然の出会いから、自閉症をはじめ障がい児・者の芸術活動を支援することとなった。そのなかで、個々人の持てる能力に着目し、取り巻く環境や社会的資源等に働きかけ、調整することによって、本人の持つ夢・希望に向けた支援をすることができた。このように偶然が周りを動かすことができた事例であるが、「私自身が一人ではできなかった。取り巻く周りの人々の熱意がこのような結果をもたらした」と考える。ならば、このような活動は、誰もができる活動である。一人ひとりが声を出し、環境を変える支援に向けた活動をすれば、「困り感」を持つ人々がさらに少なくなる社会が実現できるはずである。

障がいのある人のみならず、社会的弱者といわれる高齢者や未就労者、あるいは、抜けだすことができない貧困児・者等に対する支援についても、立場や程度の違いはあっても、同様のことが言えるのではないだろうか。

本人の持つストレングスを活かすことができる温かい環境づくり・地域づくりは、すべての人の生活を豊かにするであろう。このような社会の実現に向けた取り組みを、さらに進めていきたいと考える。

# 組織にコミュニケーション能力が 必要な時代だからこそ

主任研究員 栗田 英俊

三重県地方自治研センターに派遣され半年が経過しようとしている。その間、「コミュニケーション」について考える時間が増えた。

どうもコミュニケーションは多岐の分野で重要なキーワードだと感じ

## ① 職場のメンタルヘルス

2014年6月、「労働安全衛生法の一部を改正する法律」が公布され、これによりストレスチェック制度の実施が義務付けられた。これを受け、当センターでもメンタルヘルスについて研究を開始した。

大台町で取り組んだメンタルヘルス対策では、全職員を対象にしたコミュニケーション研修が有効であった。

また、東日本大震災での被災地自治体職員のストレス状況は依然として高く、うつ病にかかる要因としてコミュニケーション不足が最も高い数値を示している調査データを見ることができた。

会話によって精神的な負担が軽減されるのだろうが、コミュニケーションによる情報の共有は、混乱した現場の整理、職員の状態の把握、そして何から手を付けていいかも分からないような状況に打開策が見いだされることもあるはずだ。

## ② 就労困難者の雇用創出

地域若者サポートステーションでは、働くことについてさまざまな悩みを抱えている15歳〜39歳までの若者の就労支援を行っている。スタッフに話を聞くと、やはりコミュニケーション能力を高める支援は欠かせないと分かる。

現実に、2016年2月に一般社団法人 日本経済団体連合会が報告した「2015年度新卒採用に関するアンケート調査結果」によると「選考にあたって特に重視した点」に85・6%の企業が「コミュニケーション能力と答えている」。

## ③ 地域自治組織の在り方

コミュニケーションにより構築される共同体だとすると、明らかに希薄化しているのを感じていることと思う。

今は通夜も葬儀もセレモニーホールで行うケースが多いが、昔は地域コミュニティで、助け合っただけを送り出したはずだ。そこには必ず会話があつたはずなのだ。

希薄化したコミュニティに、人口減少、高齢化の問題は重くのしかかり、しかし時間をかけじっくりと地域を作り上げてきた一つの成果が「地域自治組織」である。地域が課題を共有し、分配することで成せる新たなコミュニティの形である。

## コミュニケーションの定義

近年、若者のコミュニケーション能力の低下を嘆く大人たちがいる。そもそもコミュニケーションの定義とはなんなのか。広辞苑から要約すれば、「社会生活を営む人間の間に行為される知覚・感情・思考の伝達であり、言語・文字、その他の視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする」となる。

今の若者たちのコミュニケーションの中には、携帯電話を使った電子メールやLINEアプリでの会話、SNS上で提供されるソーシャルゲームなどが含まれる。では、果たしてこれはコミュニケーションに含まれないのか。

おそらく、コミュニケーションの定義に足りないものは「空間の共有」だろう。

## コミュニケーション能力の高い組織が必要な時代

現代のコミュニケーション不足は様々な面で課題としてとらえられている。しかし、そのことを嘆くのではなく、コミュニケーション能力の向上は現代社会の複雑な問題を解決する糸口になるのではないかと考えるべきだ。

自治体職員は「地域住民の最前線」を誇りに公務を遂行してきた。しかし、地方自治体は合併により大きな組織になってしまった。地域住民から物理的にも精神的にも遠い組織になってしまったのだ。だからこそ今、自治体「組織」が

持つコミュニケーション能力が試される時代だと考えている。

組織としてのコミュニケーションは、個人のコミュニケーションとは別に考える必要がある。またデイスカッションとダイアログは別に考える方がよい。

誤解を恐れず定義すれば、デイスカッションとは議論であり、意見を戦わせる場である。ダイアログは対話であり共通理解を求める場である。つまり、『組織としての対話』が望まれる時代なのである。

私は、その答えを「フューチャーセンター」に望みたい。

考えてほしい。地域の住民と自治体職員、大学の先生や学生たち、大手企業の役員やマスコミ関係者。彼らが同じテーブルで空間を共有し、議論を戦わせることなく対話によって三重県の未来を語り合うのだ。わくわくしないだろうか？

フューチャーセンターでの対話は共通理解や共感を生む。多様性のある人たちをマッチングさせ、イノベーションを生む仕組みに他ならない。

様々な組織が対話を求める姿こそが、みえ県民力ビジョンにある「新しい豊かさ協創プロジェクト」であり、当センター理事長の目指す「住民の皆さんと一緒に考える場」に繋がるのだと、私は信じている。

多様な課題に正面から向き合い、多くの人たちの知恵を、力を借りて挑み続ける自治研究センターをこれからも目指したい。